日刊 動労千葉
80.6.6
NO449
国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二二五八～九・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

三里塚・ジェット闘争貫徹！「国鉄35万人体制」粉砕！

―不当処分粉砕・反動秋山局長追放―

第一波闘争を貫徹!!

さらに非協力闘争を継続、強化しよう。

5・31不当処分粉砕、反動秋山局長追放第一波闘争は、全組合員の怒りを体現しつつ整然と、かつ断固として闘い抜かれた。

連日の三〇〇〇～五〇〇〇分の列車遅延と一〇～二〇本の運休という現実は、36協定破棄をはじめとする非協力闘争で夏季輸送計画や55・10ダイ改が刻一刻と破局へ向っていることと併せてジリジリと国鉄当局を追い詰めている。

自信と確信をもって、さらに長期に、強力に、闘い抜いてゆこう。

闘いに追い詰められて挑発をくり返す反動・秋山局長

そもそも、誰が見ても整合性のないデタラメ極まるこの不当処分の強行は、動労千葉の原則を踏まえた闘いに追いつめられた反動・秋山が、「55・10」「56・3」を前に「正攻法では動労千葉の闘いをツブせない」という焦りから「理も非もなく力で押し切る」という決意のもとに行われてきたものである。

「クビにする」ことをまず決めておいて「後から理クツをつける」というデタラメな処分をせざるを得なくなった反動・秋山は、動労千葉の第一波闘争に対しても、あからさまな挑発行動を行っている。

公安官を前面に押したて、トラブルが起こることを想定し、現認を目的化した列車や庁舎のスローガン消しやビラはがしをこれ見よがしにやるなどというミエミエの弾圧策動は、動労千葉の整然たる闘いによって見事に粉砕された。

われわれは腰を据えてジックリと闘えばよいのだ。

われわれは、このような挑発に乗るほど甘くはない。労働者のクビを切ることの罪深さを、反動・秋山に思い知らせてやる手段は無数にある。消されても、ハガされても、スローガンやビラは後から後からよみがえり、その度に反動・秋山への怒りと憎しみは倍化されてゆくのだ。

アメとムチの組織破壊攻撃を粉砕しよう！

三日間の減産闘争＝第一波闘争の経過は、第一に5・31不当処分が動労千葉の闘いの前進に追いつめられた当局のアガキとして出されてきたものであり、動労千葉の組織力、団結力がこの不当処分に対する怒りで一層強化されたこと。

第二に、第一波闘争の爆発と非協力闘争の重圧によってさらに追い詰められた反動・秋山が邪悪・陰険な思惑のもとに、これ見よがしの挑発に出てきて、見事に粉砕されたこと。

の実態を鮮明に映し出している。

反動・秋山が次にやってくる組織破壊攻撃の手口もまたはっきりとしている。

「クビが出たから財政的にもたない」などというデマをもって組織混乱を図り、業務命令を乱発するなどさらに挑発し、弾圧の口実をつかむことを通して組織的動揺をおこさせ、闘争を圧殺してゆくというやり方である。マル生時のアメとムチつまり特別昇給とろ項8号適用などということを日常化するところまで、反動・秋山が考えているということを、われわれはっきりと見なければならない。

われわれは必ず勝利する！

われわれは同時に、このようなやり方が必ず破産し、われわれが勝利するということも確信できる。

マル生の時にどうであったかを想起すればよい。アメとムチの政策は団結の前には無力である。業務命令は全員が受け付けなければ何の力もないのだ。

当局の側から職場をメチャクチャにする策動＝不当処分を強行してきた以上、自らの職場と労働条件を守るために、われわれは闘うのみである。

われわれは、さらに非協力闘争を継続し、強化する。

反動・秋山と「本部」反動分子一体となった挑発を相手にせず、ジックリと腰を据えて闘い抜こう。夏季輸送や55・10がふっ飛んだとしても、それは当局の不当労働行為の当然の結果にすぎないのだ。

組合員バッチをつけよう

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！